

令和7年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 高見 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和7年4月17日（木）に、「教科（国語、算数、理科）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月18日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査（国語、算数、理科）

教科に関する調査（国語、算数、理科）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

(2) 児童質問調査

児童質問調査

- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語、算数、理科）の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	8.6	54	9.1	53
全国	9.4	67	9.3	58	9.7	57

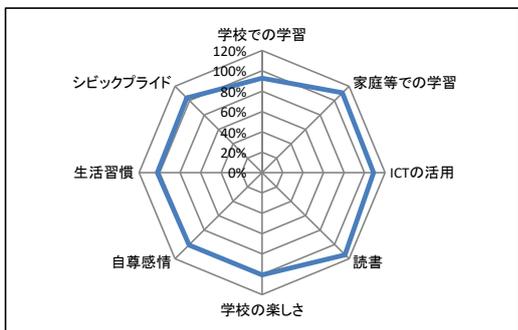
(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	「思考力・判断力・表現力等」に関する問題は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の全ての内容で、全国平均正答率を上回っている。「知識及び技能」に関する問題については、多くの問題で全国平均正答率を上回っているが、ひらがなを漢字に書き直す問題など、「言葉の特徴や使い方に關する事項」については下回っている。記述式の問題の正答率も全国平均を上回っている。	全国平均正答率との比較	上回っている
	よくできた問題	インタビューのやり取りの様子から、インタビューアの質問の意図を捉える問題。		
	努力が必要な問題	漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる問題。（あつい→暑い）		

算数	全体的な傾向や特徴など	「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」に関する問題のいずれも、全国平均正答率を上回っている。領域別に見ても、「図形」や「データの活用」など、全ての領域で全国平均正答率を上回っている。特に「変化と関係」に関する問題の正答率は、大きく上回っている。しかし、「数と計算」の「知識及び技能」を問う問題に課題がみられる。	全国平均正答率との比較	上回っている
	よくできた問題	百分率の表し方を理解し、比べる量ともとにする量の関係をもとに、割合を求める問題。		
	努力が必要な問題	異分母の分数の足し算の計算をすることができるかどうかをみる問題。 $(\frac{1}{2} + \frac{1}{3})$		

理科	全体的な傾向や特徴など	「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」に関する問題のいずれも、全国平均正答率を上回っている。領域別に見ても、「エネルギー」や「地球」に関する領域など、全ての領域で全国平均正答率を上回っている。特に「生命」に関する問題の正答率は、大きく上回っている。	全国平均正答率との比較	上回っている
	よくできた問題	花粉を観察するための顕微鏡の適切な操作の仕方が身に付いているかをみる問題。		
	努力が必要な問題	身の回りの金属が電気を通すか、また磁石に引き付けられるかどうかを問う問題。		

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



全国平均を100としたときの本校の割合

質問調査の結果分析

- ・「普段の授業で週に3回以上ICT機器を活用している」と回答した割合が約90%と、日頃からタブレット等のICT機器を用いて学習に取り組んでいることがうかがえる。また、全国平均に比べると、学校の授業時間以外でもICT機器を活用している割合が多い。しかし、まだ全体の1/4程度と少なく、教科や学習内容に合わせて、家庭学習での活用を検討していく必要がある。
- ・「読書が好き」と回答した割合が約90%である。また授業時間以外にも読書をしている児童の割合も全国平均よりも高い。情操教育や学力向上の観点からも、今後も引き続き、「読書タイム」などの読書に親しむ活動を推進していく。
- ・能動的に学びに向かう姿勢や、協同的な学習のスタイルが定着していない。「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業の在り方を見直す必要がある。
- ・「人の役に立つ人間になりたいと思う」、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」という質問に肯定的な回答をした割合が全国平均を上回っており、社会に貢献をしたいという思いをもつ児童が多く見られる。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

- ・漢字や計算といった基礎的な学力が定着するように、繰り返しドリル学習に取り組む。その際、AIドリルを活用することで、児童一人ひとりが自分の学習の定着度に合わせて学習を進めることができるようにする。
- ・児童が進んで学習に取り組んだり、学習で身に付いたことが生活の中で生きる知識や技能になったりするように、学んだことのアウトプットの方法を工夫する。
- ・昨年に引き続き、「わかる授業」づくりの5つのポイントを意識して授業改善を行い、児童一人一人に資質・能力が身に付くような学習指導を心掛ける。

② 家庭生活習慣等に関する取組

- ・小中学校・家庭・地域での連携を密にし、「高見中学校校区で目指す児童・生徒の10のすがた取組」を徹底することで、9年間一貫した指導を行い、学力の向上やよい生活習慣の定着を図る。
- ・家庭での声掛けや啓発に繋がるように、学年・学校通信やホームページで児童の学校での様子を発信し、学校と家庭が協力して指導を行う基盤を作る。
- ・地域の行事への参加を促したり、あいさつ運動を行ったりすることで、児童一人一人が明るいまちづくりの担い手であることを意識できるようにする。